

「カッシーナの家具」

(2011)

昨年、衆・参両議院開館が完成した。両棟合わせて約31万m²、事業費1800億円の巨大事業であった。以前から旧議員会館の余りにも古く、狭隘な事務所のお粗末振りは周知の通りだつた一方、新事務所の余りの贅沢振りが話題ともなつた。マスコミ報道ではこの贅沢振りに煽られるように、国會議員の定数削減が一躍話題の中心となつてしまつた感があり、マスコミ報道の大衆迎合振り・ワンパターン傾向にはいつもうんざりさせられる。案の定というべきか、当の本人達の国会内の議論の中でも、新議員会館の「カッシーナ」という外国の高価な家具の購入は何だ?国産品でも良いのがあるだろう!とのたまう議員さえ現れた。

そこで20年前のバブル全盛時に関わつた自分の或るプロジェクトの事を思い出した。東京の湾岸開発事業「天王洲アイル」である。当社と隣接の三菱商事・第一ホテルとの三社での共同開発事業であつた。当社は東京本社ビル、三菱は貸事務所とホール、第一はホテル・・・そして3社でマンションを区分所有し、共有の大ガレリヤ空間を作り、水辺にはボードウォークを配し、モノレールの新駅まで作つた。総事業費、約800億、当社分が約150億であつた。当社は本社ビルとして使う予定であったから、建物のみならず、家具・備品・IT関連機器を含む最新の本社機能一式のプロジェクトであつた。当時はバブル真っ盛りの頃でもあり重装備の新本社ビルとなつた。・・・という事で家具の発注だけ

でも半端じやない設計・仕様書となつた。時代もいよいよ「ニューオフィスプランニング」なる代物のはしりの時だった、机レイアウトのモジュール化・システム壁面収納・製品展示コーナー・プレゼンルーム・AV会議システム、等など新システム・新製品が目白押しの時だ。千人の机・椅子を始め、殆んどの家具類も新調した。この頃から我々建築屋は「半値・8掛け・2割引」の世界に入つていった。しかしパブリック周りの家具については、本社内の誰一人として認識のないカツシーナ、デセデ、ノル等やミース、コル、イームズ・・等の世界の一級品家具を予算計上し、又各フロアにはリラックススペースを配し、社員食堂の充実・夜間利用、そして1階ロビーには大きな彫刻を入れた。彫刻家を探しアトリエに行き、両手を空に挙げた等身大の女身裸像を探し出した。一方社内的には事前に会長・社長の了承を探るのに走り回った。問題は社内経営会議の承認を得る事である、この会議での説明は勿論主管箇所（総務部）が主役だが建設工事が伴えば必ず我ら建築屋が同席することが多かった。建築屋の説明は色とりどりの図面、OHPを始め、時には模型、見本品などを持ち込んでの説明になり、主管箇所の堅苦しい財務・収支の説明に疲れ果てた役員達の良い気分転換にもなつた。ここで1脚何十万、1セット何百万の家具、或いは一体1千万近い彫刻が必要な事をいかにスンナリと説明し、「まかすかが我々建築屋のいつもの難題であった。こうした建築の元々の本質「美しさ、快適さ、気持ち良さ」等はは

社経営の本質から少しづれているもので経営哲学には無い物だから。役員達も一番文句が言い易いものだが、何とかすんなり役員会を通過した。会議のキーマン・進行役である社長の事前了承を得ておくというのが最大のポイントである!!



天王洲アイル全景

92年6月、湾岸ウォーターフロントは完成し、我らの新本社ビルも一躍世間の注目を集め、テレビのトレンディードラマのオフィスのシーンでは何度も利用された。又これを機に宇部にも新本社ビルを建てようという話にもなり企画・設計案が進行し模型まで出来上がつていたが、折しもこの頃からバブルの時代は急速に萎み始めていた。バブルはその内、泡のように消え去り、世の中の会社事情はすっかり変わり、HD体

制・子会社化・キャッシュフロー財務・役員制度・人事評価制度、技術部門はおろか総務・購買業務さえ外注されるような時代になり、当社のような素材産業が本社ビルなど・・・と笑いものになるような時代となってしまった。

宇部本社ビルの計画は夢の藻屑と消え去り、この天王洲の物件も某・旅行社に丸ごと売却した。当社とすれば珍しく果断で・素早い・そして見事な決断だった。